様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　5 月　1 日現在

機関番号：13601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～　2010
課題番号：19520482
研究課題名（和文）　慣用句を手がかりに行う前置詞の棲み分け研究に基づくモジュール教材作成と高大連携

研究課題名 The Habitat Segregation of English Prepositions and the Teaching Materials Used on the Internet

研究代表者
花崎　一夫（HANAZAKI KAZUO）
信州大学・全学教育機構・准教授
研究者番号：40319009

研究成果の概要（和文）：本研究では、on, in, to, till, until, by の研究と、それに基づく教材の作成、さらには高大連携という形での教育における実践を行ってきた。また、本研究の基盤となっている認知言語学的視点の有用性を確認する意味で、生成文法が唱導しているＵＧの問題点を考察する研究や、英語と比較する意味で、日本語の助詞の研究なども行い、その成果を著作にまとめて発表した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we took up the following English prepositions: on, in, to, till, until and by and created the teaching materials used on the Internet. In addition to that, we also collaborated with neighboring high schools in order to contribute to the education of both high school students and college students by using the materials we created during the research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	0	0	0
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：英語教育
科研費の分科・細目：言語学・英語教育
キーワード：英語の前置詞，棲み分け，モジュール教材，高大連携

１．研究開始当初の背景

前置詞の多義研究は、１語の多義を扱う Semasiological な研究（例：fruit は果実・結果・・・・という意味があるとする研究）に終始している感があるが、本研究は、それに近似義語を扱う Onomasiological な視点（例：果実を表す語には fruit・nut・・・・があるとする視点）を加え、その近似義語間に見られる意味の重なりの緊張関係が意味拡張を阻止すると考えた。先行研究の中には、２語以上を扱う研究もあるが、それらの違いを述べるにとどまり、その違いが意味拡張を制限するといったような「動的」な研究はまだなかった。

２．研究の目的

(1)学術的背景

我々は以前、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるようにSemasiological な視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1)意味が際限なく広がることを阻止することはできず、(2)新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで、意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意味要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、pragmatic strengthening を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、Onomasiological な視点にたち、近似義語の中心義が意味拡張を制限するという立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。さらに、その緊張関係の中で、意味拡張の可能性を阻止されたものは、**慣用表現**としてのみ存在しうるということがわかった。

(2)何をどこまで明らかにするか

一般的に「機能語」と呼ばれる語のうち、きわめて多義的に見える前置詞の意味を、各前置詞の意味の「棲み分け」をもとに、また、慣用表現を手がかりに、明らかにする。

【どこまで】すべての前置詞の意味の「棲み分け」を明らかにするのを目的に、まずは、「近接関係」をあらわすすべての前置詞の意味を、それらの意味間の関係を中心に、総合的に明らかにする。

【どのように】各語の多義記述には、認知意味論的手法、および、通時論的手法を使い、意味拡張は、慣用表現を手がかりに、行為（practice）理論、Onomasiological な手法を使う。

認知意味論的手法：　多義は家族的類似性をもとに用法が拡張をしているという考え方を採用し、各語の用法の広がりを検証。

通時論的観点：　多義性の高い単語には歴史的要因が大きいことが多く（例えば so から発達した as)、意味論研究と平行して単語の歴史を研究する。

行為理論・Onomasiological な手法：意味拡張を pragmatic strengthening と onomasiology によって説明する。

(3)研究の特色および意義

【歴史的研究を取り入れる】　前置詞などに関する研究は少なくないが、多くは現代語だけを対象にして論じている。本研究では通時論的観点を不可欠なものとして取り入れており、それが本研究の特徴となっている。

【慣用表現への新たな視点】慣用表現とは、２語以上の語が集まって使われる表現（例：but for, by day）であるが、従来の多義研究では、それらは、メタファーやメトニミーによる意味拡張によってできたと説明されてきた。ところがその説明だけでは、意味拡張を制限出来ないだけでなく、どうして中核から大きくはずれた意味は、２語以上の語が集まった慣用表現の形でしか残ることができなかったかが説明出来ない。本研究は、慣用句は、onomasiologically に共存していた複数の語の内(例：「～の間」by, during)、他の語にブロックされたものは、別の語との組み合わせの中でのみ存在しうる(別の語の助けを借りてのみ存在しうる。例：「～の間」なら、during によってブロックされた by は、day という別の語の助けを借りて by day という慣用句としてのみ生き残れた)ものであるという見解をもつ。

【意義：英語教育への応用】　本研究はその研究結果を、高校生の英語教育、そして大学生の英語教育・英語学教育へ還元することを視野に入れている。一般的に「機能語」と呼ばれる語の学習は、英語学習者が最も困難に感じる学習の一つである。そこで本研究は、個々の前置詞の意味を、前置詞の「棲み分け」を体系的に説明することを通して明らかにすることによって、多くの英語学習者が困難に感じる「機能語」の学習の負担を軽減することが期待できる。そして本研究は、研究成果を、高校生と大学生に高大連携の取り組みの中で伝授すると同時に、大学生の自学自習用教材として開発するモジュール教材としてサーバーに載せることになっている。（現在では、実際の教育に活用中である。）

【意義：動詞等、他の多義研究への応用】　本研究は、前置詞の多義を各前置詞の意味の「棲み分け」をもとに、また慣用表現を手がかりに、明らかにしようとするものである。類似義語が際限ない意味拡張を阻止し、その可能性が重なる緊張関係の中で他の語にブロックされたものが、別の語との組み合わせの中でのみ存在しうるとするのであるが、この理論は、容易に他品詞の多義（例えば動詞の多義、come,go の棲み分けなど）に応用できるものであろう。

３．研究の方法

研究方法１：　各語の意味ネットワークの作成

対象語の現代英語での用法を、先行研究渉猟結果を参考にしながら整理し、仮の意味ネットワークを作成する。その手順は次の通りである。

(1)採集したデータを使って、対象語の現代英語での用例を収集する。

(2)それらの用例を意味に従っていくつかのグループに分類する。

(3)それぞれのグループのイメージスキーマを作成する。
(4)イメージスキーマの共通点・相違点を手がかりに、近い用法どうしを結びつける。
(5)結果として中心にくる用法を**中心スキーマ**と認定する。
(6)他の用法とつながらない用法（**孤立用法**）を確認する。
(7)「慣用表現」を確認する。
(8)高校生の起こしやすい間違いがなぜ起こるかを確認する。
(9)-(15) 古英語期、中英語期、初期近代英語期についても同上(1-7)の作業をする。
(16)過去の用法について、他言語（特にフランス語、北欧語）での用法が影響を与えている可能性について調査する。

研究方法２：Onomasiologicallyに、関連する語を、孤立用法・慣用表現をもとに検証し、対象前置詞の棲み分けを明らかにする。

発表方法１：高校生が起こしやすい間違いを分析し、それがなぜ起こるかを確認し、その情報をもとに、高大連携で研究結果を生かす。具体的には、以下の４段階を踏んで、大学生に高校生の英作文を添削させる。
(1)大学生に向けて、前置詞の棲み分けを説明する。　←大学生への英語・英語学教育
(2)(1)と同時に、高大連携を結んでいる高校生にその前置詞を含む英作文を行ってもらう。
(3)(1)で習った情報を元に、大学生に高校生の英作文を添削させ、コメントさせる←大学生の英語教育
(4)(3)で採点されたものを、教員が一度チェックした後、高校生に返す　←高校生の英語教育

発表方法２：各前置詞の棲み分けを、モジュール教材（テーマ別の小教材）として作成し、ゆとり教育の下で教育されてきて実力にばらつきのある学生が自学自習できるよう、棲み分けを元にした前置詞の意味の説明をサーバーに載せる。

４．研究成果

我々は、本研究に取り組む以前は、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるように、semasiologicalな視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1)意味が際限なく広がることを阻止することはできず、(2)新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで、意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意味要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、pragmatic strengthening を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、onomasiologicalな視点（例：果実を表す語には fruit, nut などがあるする視点）にたち、近似義語の中心義が意味拡張を制限するという立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。さらに、その緊張関係の中で、意味拡張の可能性を阻止されたものは、慣用表現としてのみ存在しうるということがわかり、この考えのもとに前置詞の棲み分け研究を行い、一定の成果をあげてきた。

具体的には本研究では、on, in, to, till, until, by の研究と、それに基づく教材の作成、さらには高大連携という形での教育における実践を行ってきた。特に最近、大学教育の質保証が叫ばれている中で、このような自学自習用教材を作成し、それを教育に活用するという流れは、今後も絶やすことなく続けて行かなければならないと考えている。幸いなことに、平成２３年度から２５年度にかけて、with, by, for, against, opposite, beside, in front of に関して、この研究の発展的研究をするための科学研究費の交付の決定が内定した。したがって、今後も前置詞の棲み分け研究を生かしたモジュール教材の作成を続けていかねばならないと考えている次第である。

また、本研究テーマとは直接関係ないが、本研究の基盤となっている認知言語学的視点の有用性を確認する意味で、生成文法が唱導しているＵＧの問題点を考察する研究や、英語と比較する意味で、日本語の助詞の研究なども、本研究の関連研究として行った。
これらの研究成果は、最終年度（平成２２年度）の３月に報告書として出版した。詳しい内容は報告書に譲るが、報告書について簡単に説明すると、第一部を前置詞の基礎研究、第二部をモジュール教材関連研究、第三部を高大連携関連研究、第四部をその他の関連研究とし、平成１９年４月から平成２３年３月までに発表した論文や、学会で発表した内容を記載したレジュメなどから主要なものを掲載し、我々が４年間（育児休暇のため中断した１年間を含む）で発表した研究成果を発表することができた。今後もこのような形で研究成果を世の中に発表し、また前述のように研究成果を教材として活用することで、英語教育全体に貢献したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　19 件）
1. “信州大学版ムードル（e-ALPS）で用いる補助教材をいかに英語授業に生かすか―英語の前置詞の学習を例にして―”（花

崎一夫『信州大学人文社会科学研究第５号』、152-164, 2011 年３月』　査読あり）

2. “自学自習用モジュール教材を活用した英文法教育―受動態の教材を例にして―”（花崎一夫『信大言語教育第３号』、33-40, 2011 年３月　査読なし）
3. “「双方向型中高大連携」内発的動機づけを高めることを通して大学教育の質を高めるための中高大連携”（花崎美紀『人文科学論集文化コミュニケーション学科編４５、33-52, 2011 年３月』　査読あり）
4. “日本語および英語、それぞれの言語文化に見られる相同性についての一考察 –*As* の意味論を中心に―”（花崎美紀『Human Linguistics Circle 53　（人間と言語研究会）』2011 年２月　査読なし）
5. ・“「N の学生」の訳し方”（加藤鉱三・黒田航『AAMT ジャーナル』No48 11-14, 2010 年 査読なし）
6. “普遍文法（UG）仮説の現在―その功罪を問う―”（花崎一夫『信州大学人文社会科学研究第４号』、127-134, 2010 年３月 査読あり）
7. “認知言語学とその英語教育への応用―英語の名詞・前置詞・受動態を中心に―”（花崎一夫『信大言語教育第２号』、33-38, 2010 年３月　査読なし）
8. “「事態間読み込み」という観点からみる As の意味論”（花崎美紀『人文科学論集（文化コミュニケーション学科編）, 44』、2010 年３月　査読あり）
9. 14. “並列構造の不正な統語解析結果を統計的に検出する”（加藤鉱三・黒田航『言語処理学会第 16 回年次大会(NLP2010)発表論文集』888-891　2010 年　査読なし）
10. “前置詞の棲み分け–in と on を中心にして”（花崎一夫・加藤鉱三『英文学研究支部統合号』Vol 1 233-242, 2009 年１２月　査読あり）
11. “語レベルに見る＜有界性＞と＜無界性＞–メタファーから見る相同性”（花崎一夫『英文学研究支部統合号』Vol2、411-412, 2009 年１２月 査読あり）
12. “日英語の語レベルにおける相同性をめぐって”（花崎一夫・花崎美紀『信州大学人文社会科学研究第３号』、56-70, 2009 年３月　査読あり）
13. “上を表す前置詞 Upon/ On そして In の意味論–前置詞の包括的な分析にむけて–”（花崎美紀・花崎一夫『人文科学論集（文化コミュニケーション学科編），43』61-69, 2009 年３月　査読あり）
14. “今の機械翻訳に利用者が望めること，望めないこと”（黒田航・加藤鉱三『日本語学』30-43, 2009 年　査読あり）
15. “if 節を伴わない仮定法の翻訳手法”（加藤鉱三『言語処理学会第 15 回年次大会(NLP2009)発表論文集』650-653, 2008 年 査読なし）
16. “大学教育の質を高めるための高大連携のあり方－英語の前置詞の学習を例として－”（花崎一夫・花崎美紀、『信州大学人文社会科学研究第２号』90-104, 2008 年３月　査読あり）
17. “言語学的視点からの和英翻訳エンジンの評価と改良のための提案”（加藤鉱三『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集』309-312, 2007 年　査読なし）
18. “日本語結果述語は動作オプション表現である”（加藤鉱三『結果構文研究の新視点』　217-248, 2007 年　査読あり）
19. “デには「意味」がない”（加藤鉱三『レキシコンフォーラム』　229-314, 2007 年　査読あり）

〔学会発表〕（計　5 件）

1. “ The Semantics of As: Intersubjectiv”ity” in Polysemy ”（Miki Hanazaki, ELSJ International Spring Forum, Aoyama Gakuin University 2010）
2. “日英語における相同性を考える―＜有界性＞と＜無界性＞―”（花崎一夫、日本英文学会中部支部、信州大学 2008 年）
3. “Semantics of Prepositions”（Kazuo Hanazaki and Miki Hanazaki 、ELSJ International Spring Forum, Tokyo University of International Studies 2008）
4. “「場所」を表す語から見る相同性”（花崎美紀・花崎一夫、日本英語学会第２５回大会ワークショップ、名古屋大学 2007 年１１月）
5. “前置詞の棲み分け”（花崎一夫・加藤鉱三、日本英文学会中部支部大会、愛知淑徳大学 2007 年１０月）

〔図書〕（計　4 件）

1. 慣用句を手がかりに行う前置詞の棲み分け研究に基づくモジュール教材の作成と高大連携　研究成果報告書（花崎一夫・加藤鉱三・花崎美紀、186p2011 年３月）
2. 『言語の間主観性―認知・文化の多様な姿を探る』「間主観性の観点からみる As の意味論」（花崎美紀、早稲田出版会、120p2011 年２月）
3. “PRACTICE-BASED RECONSIDERATION OF LINGUISTIC RELATIVITY: PDN APPROACH TO NEGATIVE-QUESTIONS（博士論文）”（花崎美紀、慶応義塾大学、181p 2008 年３月）
4. 『開放系言語学への招待―文化・認知・コミュニケーション』「言語と文化の相同性」（花崎美紀、慶応大学出版会、241p

2008年１０月）

６．研究組織
(1)研究代表者
花崎　一夫（HANAZAKI KAZUO　　）
信州大学・全学教育機構・准教授
研究者番号：40319009

(2)研究分担者
花崎　美紀（HANAZAKI MIKI）
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：80345727

加藤　鉱三（KATO KOZO）
信州大学・全学教育機構・教授
研究者番号：20169501